

「カンカンムロ」



むかし、むかし、今の酒々井町が、住む人もまばらなひなびた村だったころのことです。

印旛沼は今よりもずっと大きくて、豊かでゆったりとした水面は、まわりの山々のすそまでせまっていました。

新堀とよばれているところに、ひとときわ高く、美しい姿をした山がそびえ立っていました。ちよつと見ると、沼に浮んだ島のように見えるので、人々はこの山を巖島とよんでいました。

山の頂には、弁財天（弁天様）がまつられておりました。信心深い村の人たちは、のら仕事の合間には巖島に向つて手を合わせ、毎日の幸せを願うのでありました。

この山の中腹に「隠れ里」といわれる、「ほら穴」がありました。その中は広く、ずっと奥の方まで続いていました。だれが作ったのか、「ほら穴」の入口より少し入ったところに門があり、その向こうに小さなほこらがありました。

その前に立つて地面をたたくと「カン カン」とまるで、かな物を打ち合わせたような音がするのです。そしてその音は、かべにこだましながら、「ほら穴」の奥へと消えて行くのでした。

ですから、村の人たちは、ここを「カンカンムロ」ともよんでいました。

ある日のことです。ひとりの若者が頂上の弁財天にお参りに来ました。その身なりはみすぼらしく、悲しげな顔つきをしていました。若者は、弁財天の前にたたずんで、しばらくお祈りをしていました。



巖島の頂上から見わたす沼の景色は、それはそれは美しいものでした。秋の日に照らされた沼の水は、大きな鏡のように光っていました。向かいの山のやわらかな形も、遠くの街道の松並木も、村人たちがそれをながめると気持がはげばれとるのでした。

しかし、顔をあげた若者の表情はくらいものでした。若者はなや

んでいたのです。若者は近く結婚することになっていました。それはうれしいことなのですが、結婚式のしたくができないからでした。

この若者は貧しい百姓ではありませんでしたが、まじめで働き者でありました。ですから、それなりのたくわえをしようと心がけていました。そして、このへんのだれもがするようになり、となり村の長者どんに、婚礼の着物やおいおいの酒盛をするうつわを借りにいきました。長者どんは欲ばりでありましたから、もちろんお金をとって貸していたのです。若者はつつましい人でありましたから、みえをはずらさず、ほんの少しのものしか借りるつもりはありませんでした。ところが、お嫁さんになる人の父親は、りっぱな婚礼ができなければ、娘はおよめにやらないぞ、と言うのです。若者は、その娘がたいへん気に入っていました。ですから、娘の父親に思いなおしてくるよう頼みましたが、なんとしても聞きいれてくれません。

若者には、そんなりっぱな婚礼ができるほどのお金がありません。その日はせまるばかりです。長者どんにも頼みましたが、お金にみあった分しか貸せないと言います。

若者は、うかぬ顔で山道を下りはじめました。

「ああ、なんとかならぬものかなあ。」

思わず、ひとりごとが口をついてでます。

「婚礼のしたくができればなあ。」

「その願い、聞きとどけようー。」

とつぜん、そんなことが聞こえてきました。かすかな声ですが、

おごそかなひびきがありました。

若者はびっくりして立ち止まりました。そこは「カンカムロ」の前でした。声は、その中から聞こえてきたようです。若者は、おそるおそる入口に近づきました。

「だれか、いるのですかい。」

「その願い、聞きとどけようー。」

こんどはいくぶんはつきり聞こえました。

「ほんとうですか。」

若者は目をかがやかせて中へ入りました。

「その願い、聞きとどけようー。」

その声は、「ほら穴」の奥の方から流れてくるようでした。

「あすの朝、ここにまいれ、望みの物を貸してつかわす。」

それっきりで、そのふしぎな声はやみました。若者はあつけにとられたような顔をして「カンカムロ」を出ました。

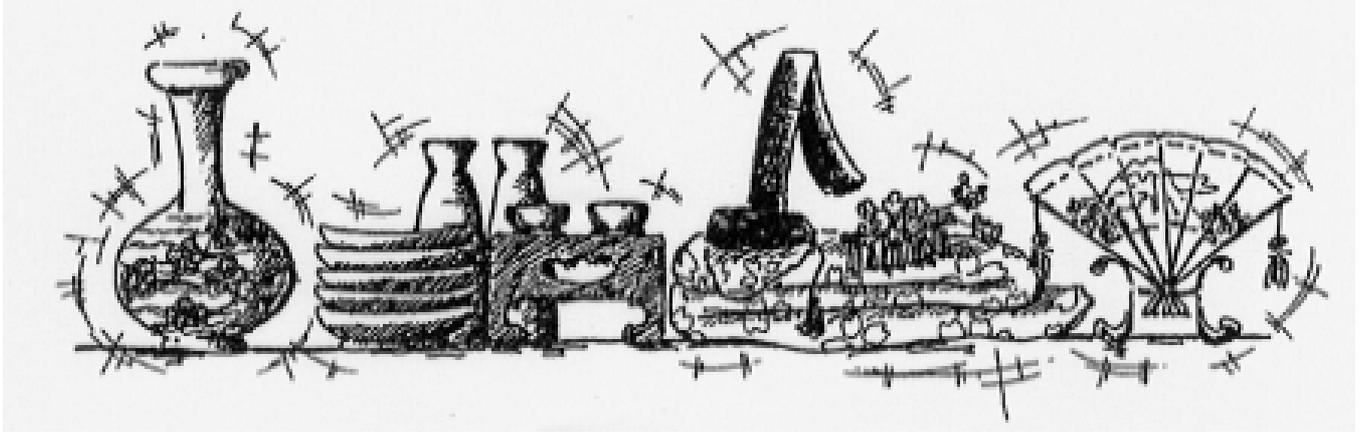
次の日の朝、若者は信じられない気持ちで巖島にのぼりました。「カンカムロ」に入ると、驚いたことに、婚礼の用具がちやんとそろえられているではありませんか。

「ひたたれ」とよばれるりっぱな着物や、かんむりや、「へいし」とよばれる酒器や、食器や、りっぱな「ついたて」や祝いごとに必要なものは何から何までそろっていました。

若者は手を打ち足をふみならして喜びました。

「ありがとうございます。ありがとうございます。」

若者の声と、手足をならす音は、「ほら穴」の空気を「ウウーン」



とふるわせました。

その後、りっぱな結婚式があげられたのは言うまでもありません。若者はこの上なく幸せな顔をしていました。およめさんは、はずかしそうな顔をしていましたが、これもうれしさをかくしきれません。およめさんの父親もじょうきげんでした。村の人たちは、こんなりっぱな結婚式がどうしてできたのだろうかと思議に思いましたが、若者は、たずねられてもだまって笑っているだけでした。

若者は、最初「カンカムロ」のことは秘密にしておこうと考えたのですが、正直な人がただけにだまっていられなくなりました。

若者は、困っている人たちには「カンカムロ」のことを話しました。ですから貧しい百姓たちは、何かあるたびに「カンカムロ」のほころにお願いで、いろいろな道具を借りるようになっていました。そして、使って終わるとすぐその日に洗い清め、もとのままにして返しました。

村の人たちは、そのごりやくを与えてくれた弁財天の前にもまして、あがめるようになりました。そして、みち足りた心で仕事にはげむようになりました。

やがて、「カンカムロ」のうわさはしだいに広がっていきました。今ではこの村の人たちだけでなく、となり村やそのまたとなり村の人たちまで、「カンカムロ」から物を借りていくようになりました。

ある年のことです。長者どんの家では、ひとり娘に、おむこさんをもろうことになりました。そのおむこさんは、都に住んでいて、身分の高い人でした。

長者どんは、このへんにはなかったような、りっぱな婚礼の式をあげたいと考えました。そして、三月も前からその用意を始めました。欲ばりの長者どんでも、娘かわいさから、ありったけのお金をつぎこみました。

でも、なかなか満足のいく準備ができません。話に聞いた遠い都での婚礼の式のようにすを思い浮かべると、もつともつとりっぱに……と考えるのでした。

「カンカムムロ」の話聞いたのは、そんな時でした。よく聞いてみると都のようすとよく似ています。長者どんは、ふだん弁財天を拝んだこともありませんでしたが、婚礼道具を借りようと決心しました。

さつそく、おともをつれて厳島にのぼりました。弁財天でのおいのりもそこそこに、「カンカムムロ」に入って、パーンパーンとかしわ手を打って言いました。

「このへんではやったこともないほど、りっぱな婚礼の式をあげたいと思います。なにとぞ、いちばんりっぱな道具を貸して下さい。」

「そのねがい、聞きとどけよう。」

かすかに返事がきこえたような気がします。長者は喜んで家へ帰りました。

そして次の日、八人の下男をつれて、再びやってきました。そこには、物持の長者どんでさえ見たこともないりっぱな品物がそろっていました。りっぱな「おわん」や「おぜん」、金糸銀糸を織りこんだ「うちかけ」、貝をちりばめた「ふばこ」、きれいなもようの「つ

ぽ」。

長者どんは、用意してきた箱にそれらをつめると、下男にかつがせて、家へ帰りました。

長者どんの家の婚礼の式は、それはそれは、はなやかなものでした。近くの村の人たちもいっぱい、見物にきました。長者どんは、「こんなりっぱな式は都でもめずらしかうて。」と鼻をヒクヒクさせて、むこどのに話かけました。

「そうですね。私もおどろきました。」

むこどのは、ニコニコして言いました。

こうして長者どんの婚礼の式はめでたく終わりました。

ところが、長者どんは「カンカムムロ」から借りた品物を返さなかつたのです。

はじめはそんなつもりはなかつたのですが、式が終わり後のしまつをしてみると、ことさらに、それらの品々がとおく思われ、すぐ返すのが惜しくなってきたのでした。

「二、三日くらい、いいだろう。」

なんというはじ知らずでしょう。四日たち、五日たつても長者どんは、それを返しませんでした。欲ばり者の長者どんは、からの荷箱を下男にかつがせて、厳島にのぼりました。「カンカムムロ」から借りた品物を返したように見せかけるためでした。それらの品物は、実は、自分の屋敷の中にある土蔵の中にしまいこんでしまったのです。でもふしぎなことが起こりました。長者どんが家へ帰って土蔵をあけてみると、これはどうでしょう。けさたしかにしまった、あ

の品物は、けむりのように消えてしまっていたのです。

それからというものは、村人たちが、いくらおねがいしても、「カンカムロ」の中から品物が出てくることはありませんでした。

ほら穴の中は、しーんと静まりかえっているだけです。ただ、「カンカム」とひびくこだまだけがもとのままでした。

でも村の人たちの弁財天に対する信心は変わりありませんでした。「カンカムロ」にも毎年、新しいしめなわがかざられました。

ところで、あの長者どんはどうしたでしょう。あれから長者どんの家は、年ごとに家運がかたむき、家の人たちは、どこかに移って行ってしまいました。

それにひきかえて、正直な若者の家は、およめさんと二人で、一生けんめいに働いたので、だんだん暮らしもよくなり、子供も生まれて、楽しい幸せな日を送っていました。

印旛沼はそんなことにはおかまいなしに、あいかわらず、静かなたたずまいを見せていました。

